

(1) 材料単価：「品番マスター」へ品番登録と「標準材料単価」の登録

「標準材料単価」は「品番マスター」への登録となります。「標準材料単価」は「在庫単位数」で登録します。つまり「品番マスター」設定時は、なるべく基幹システムの購買管理や在庫管理の単位、単価と一致させて登録できるようにするためです。その情報を元に「品番マスター」に設定し、原価計算上の計算単位として「使用単位」を設定し明細取込み時に「在庫単位」「使用単位」変換を掛けることで受払数量の整合を図っています。

ここでいう「標準材料単価」は、基幹システムの「発注購買システム」や「生産管理システム」「在庫管理システム」と異なり、標準原価計算の基礎となる単価です。そのため資材発注単価マスターの変更があったり、値引き等の交渉が合った場合のような日常業務上の単価変更の都度品番マスターの単価を変える運用は好ましくありません。

材料の標準単価は通期や半期等原価計算や予算管理等経営管理上の一定期間中は変更しないのが望ましいです。何故なら、標準原価はその名が示すように、会社が“標準”として意思を持って設定した原価(単価)情報であって、“原価維持(コストメンテナンス)”という原価管理の観点から、標準原価通りに運用することをもって全社計画を立てているからです。そして実際に仕入れた単価と実際の単価の差は常に「原価差異」で詳細に把握でき、何に問題があったのか一目で分かる仕組みになっています。そのため、その単価を実際業務に即していちいち変更してしまうと、元々立てた標準単価がどんどん変わっていき、当初立てた計画との整合が取れなくなってしまうのです。

実際業務に即して変更した単価は一見正しい原価計算上好ましいように考えがちですが、その都度変更の中に実は原価管理上は好ましくないものが混入している場合があります(ex見積誤りによる特急発注のための値増し、大量の工程不良による追加発注のための特別価格、購買計画の読みの甘さによる単価変動等々)。SHINでは年間を通して決定した標準原価は常に実際原価、実際単価と比較していますので、どの工程で、どの材料品番が、何故原価上負荷が増加したのか？という理由をたちどころに表示します。

さらに在庫評価上も仮に材料単価の増減が一定以上あり、原価差異が一定以上の大きさで変化をしても、SHINの持つ「品番別の原価差異配賦」機能によってその変化分を帳消しにする形で「実際原価」に補正計算されますので、決算対応時も安心です。